

ぶ。口角泡飛ばすは此處のことで、おしゃべり過ぎた時の形容詞である。上唇と下唇の正中に歯齦と連続して粘膜の襞がある。上下唇繫体が異常な發育すると中切歯は左右に開いて容貌を害う事が甚だしい。世俗両親に早く離れるという迷信のあるを知るもの多けれど衛生上これを切除して歯を原位置に復する医術あるを知るもの甚だ少ない。唇の左右は頬で、肉付きよきは圓福家の相をなし、こけ落しは貧相にして神経質の者に多い。」などと人相との関係なども文中に取り入れて、口腔衛生教育書としてばかりではなく読み物としても楽しめるように書かれている。第二章 食物と歯はどんな関係があるか (16~41 頁) では、身体の構成要素やエネルギー、カロリー、三大栄養素、ビタミン、ミネラルなど、今日の栄養学の内容について書かれている。第三章 どうすれば歯が強くなるか (42~51 頁)、および第四章 どうして歯列が悪くなるか (52~58 頁) では、今日の小児歯科学や歯科矯正学についての話題を取り上げており、上顎前突および下顎前突の症例の咬合模型と歯列矯正を行った術前・術後の写真を掲載している。第五章 むし歯と全身病はどんな関係があるか (59~62 頁) に次ぐ第六章 むし歯の予防で消費節約の問題も解決される (63~66 頁) では齲蝕と所謂医療経済との関係についても言及し、よく噛んで食べることが消費節約にもつながり、日本国民の生命をも延長し国家と家庭の幸福を増進する最良策であると述べている。第七章 歯刷牙の話 (67~78 頁) は「強制的に行ふ家の掃除より口腔の清潔法を勧考せよ」の項に始まり、歯刷牙選択の重要性、様々な歯刷牙の特徴、保存法などについて参考写真を載せながら述べている。第八章 小学校に於ける口腔衛生とはどんなものか (75~86 頁) では小学校における口腔衛生の重要性について、歯痛と学校の出席率や歯科疾患が学童の心理上の影響に就ての調査など著者自身が行った研究結果を紹介している。また後半では清美第五小学校と天王寺第五小学校における歯刷牙教練の様子と実際の指導方法を写真とともに紹介し、その成果を海外の事例を交えながら報告している。本冊子の裏表紙には印刷費の補助を行ったライオン歯磨の広告が載せられている。

22) その後の桜歯ニュース第 14 号から第 22 号 (復刊第 2 号) について

The outline of article OSHI News from the 14th to 22nd (reissuing the second) after the 13th of OSHI News which did a big revision (Publication on June 20, the 44th year of Showa)

日本大学松戸歯学部 ○渋谷 鉦
加來 洋子
大竹 繁雄
牧村 正治
谷津 三雄

Koh Shibutani, Yoko Kaku, Shigeo Otake,
Masaharu Makimura and Mitsuo Yatsu, *Nihon
University School of Dentistry at Matsudo*

昨年の本学会総会において、紛争時代の昭和 44 年 6 月 20 日発行「桜歯ニュース 第 13 号」は大幅な改訂がなされていたことについて、故押鐘篤名誉教授寄贈の教授会記録から「実際に発刊された桜歯ニュース」と「発刊予定の桜歯ニュース」の内容について報告した。

今回、その後の桜歯ニュース 14 号 (昭和 44 年 7 月 10 日)、15 号 (昭和 44 年 9 月 5 日)、号外 (昭和 44 年 9 月 1 日)、16 号 (昭和 44 年 12 月 25 日)、17 号 (昭和 45 年 4 月 1 日)、18 号 (昭和 45 年 5 月 22 日)、19 号 (昭和 45 年 6 月 24 日)、20 号 (昭和 45 年 10 月 31 日)、21 号 (昭和 48 年 11 月 15 日) および 22 号 (昭和 49 年 5 月 15 日) の計 8 点の資料から、学園紛争終了後の日本大学歯学部の状況と、日本大学松戸歯科大学 (昭和 46 年 5 月 20 日開学) の取り扱い方についても触れてみたい。

昭和 43 年 4 月からはじまった学園紛争は、翌 44 年には平穩になるのであるが、この期間における記載は日本大学 60 年史 (昭和 54 年 3 月刊) によると「国税局調査について、新聞、テレビなどで報道される 5 月下旬より大学紛争が起こり、次第に全学的規模で激化する。全共闘会議が結成され、不法な集会、デモ、暴力行為が連日行われ、さらに各学部校舎のバリケード封鎖、不法占拠が次ぎ次ぎに行われる。6 月 21 日歯学部全集会、6 月 26 日歯学部後援会総会ならびに父兄会開催、9

月 17 日歯学部全学討論会，昭和 44 年 1 月 25 日両国日大講堂において，歯学部全学集会スト権解消，バリケード撤去，授業再開を決議，2 月 4 日歯学部学生の手で進学校舎のバリケード撤去，2 月 9 日全学生，教職員合同集会，学生の防御体制解き，学内を整備し，授業を再開するとの方針を決定，3 月 1，2 日入学試験も混乱なく実施することができ，また，学生，教職員の長い苦闘のなかで，6 年生の教育も無事終了し，3 月 31 日には厳粛裡に卒業式を行うことができた。」との記載がみられるだけである。

この間の桜歯ニュース 14，15，号外（昭和 44 年）は教育資料調査室発行，16 号，17 号，18 号，19 号，20 号（昭和 44 年～昭和 45 年）は渉外広報委員会発行，そして 3 年間におよぶ休刊の後，第 21 号（昭和 48 年以降）は日本大学歯学部発行になっていて大きな違いをみることができる。

桜歯ニュース第 22 号では，歯学部長新国俊彦がごあいさつとして「桜歯ニュース復刊第 2 号の発刊にあたり，一言所感を述べてごあいさつ申し上げます。皆さま方もよくご承知の通りこの桜歯ニュースは日大紛争当時，正確な情報が伝わらず無用に混乱したのを是正するために発刊されたのであります。今回復刊されたのは形式的には桜歯ニュースを継いでいますが，内容的には全く新しい構想で発足したものです。…当歯学部は創設者の佐藤運雄先生時代から「和」をもって学風としてきましたが，和とは主張すべきところは主張し，衆知を集めてさいごに到達するものであります。一方的に上からの意志で抑えつけるものではありません。

全員が心から賛同できるように，自由に意見を述べることが何よりも必要です。そのためにも，この種の情報提供がもっとも重要だと考えております。この桜歯ニュース復刊の趣旨をよく理解されまして，歯学部のより大きな発展のために十分にご利用くださることを心から願っております。」と，桜歯ニュース復刊第 2 号という表現が冒頭に使用されている。

また，第 19 号においては，第 1 面に「6 月 2 日 4 時から第 4 講堂において，学部長は全教職員に対して，松戸校舎に関する説明を行った。なお同日付で学生自治会に対しては次のような回答文を手渡した。」とある。押鐘 篤は日本大学松戸歯科大学—その誕生 1 カ月の記—（日本歯科評論 1981 年 7 月 p61）のなかで次のようにのべている。「…鈴木総長（当時の歯学部長）の企画構想により，昭和 42 年日本大学理事会で新しく別の歯学部を設置することが決定された。…おまけに悪いことには，翌昭和 43 年にいわゆる日大紛争が起こったために，新大学には手が回らなくなった。…日大紛争がおさまったころ，国では米があまって農業の基本方針が変革された。それで事態が急に好転し，昨年 3 月に水田を宅地に転用することの許可が下りた。…紛争後の日大の新理事会での松戸建設計画の再確認。急遽設計に着手。…こんな巨大なビルが 8 カ月足らずで完成したのは，建設業界でも珍しよし。」日大紛争は，日本大学松戸歯科大学の創立時期を遅延させていたようである。